

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22530193

研究課題名(和文)日本のリカード研究と欧米のリカード研究の比較検討

研究課題名(英文)A Study of Differences between Ricardo Studies in Japan and in the West

研究代表者

福田 進治(FUKUDA, Shinji)

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：00322925

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、スラッファ編『リカード全集』刊行(1951-73)以来の日本のリカード研究と欧米のリカード研究を比較検討し、欧米の研究者たちが理論的貢献や現代的意義を重視する立場から、スラッファのリカード解釈を支持し続けていること、これに対して、日本の研究者たちがスラッファのリカード研究から大きな影響を受けながらも、歴史的事実や内在的視点を重視する立場から、スラッファのリカード解釈を批判したこと、そして、リカードの労働価値理論の発展過程に関する研究を中心に、独自の高度な研究成果を生み出してきたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, I examined and compared Ricardo studies in Japan with those in the West since the publication of <Ricardo Works> (1951-73) edited by Piero Sraffa. As a result, I found that Western scholars had continued supporting Sraffa's interpretation of Ricardo in accordance with their belief in the importance of theoretical contributions and modern significance. I also made clear that, although they had received considerable influences from Sraffa, Japanese scholars, who valued historical facts and inherent viewpoints more, had criticised Sraffa's interpretation of Ricardo. In addition, I emphasised that Japanese scholars had brought about original and outstanding studies of Ricardo, mainly on the study of development process of his labour theory of value.

研究分野：経済学史

キーワード：古典派経済学 リカード スラッファ

### 1. 研究開始当初の背景

スラッファ編『リカード全集』刊行以来の欧米のリカード研究は、スラッファのリカード解釈の是非をめぐる論争に特徴づけられる。スラッファの解釈の核心部分には、初期リカードの利潤理論に関する「穀物比率論」解釈があった。その後、欧米では、スラッファ派と新古典派の対立を中心とする多くの論争が継起したが、今日に至っても、欧米の多くの研究者はこうしたスラッファの解釈を強く支持している。これに対して、日本のリカード研究はその導入期以来、マルクス研究の影響下に置かれながらも、リカードの歴史的本来の姿を追求してきた。このために多くの日本の研究者はスラッファの解釈に懐疑的であり、むしろリカードの労働価値理論の役割に注目し、その発展過程に関する研究に取り組んできた。しかしながら、その間、日本のリカード研究者は、必ずしも十分に彼等自身の研究成果を欧米に向けて発信してこなかった。欧米のリカード研究者も主として言語上の問題のために、今日に至るまで日本のリカード研究の成果を正当に評価することができなかった。こうした状況が、国際的に見たとき、リカード研究のさらなる発展にとっての大きな足枷になっていた。

### 2. 研究の目的

本研究では、多くの問題に関わる日本と欧米のリカード研究のうち、初期リカードの利潤理論をめぐる問題とリカードの労働価値理論をめぐる問題を扱うこととした。具体的には、以下の3点である。

(1) 欧米のリカード研究の核心部分には、スラッファの初期リカードに関する「穀物比率論」解釈がある。日本の研究者はスラッファの解釈を批判しつつ、彼等独自の「部門別利潤率規定論」解釈を主張してきた。本研究では、こうした日本の初期リカード解釈を欧米の研究者に本格的に紹介しつつ、これらと比較検討することを通して、日本の研究成果の意義を明らかにし、同時にスラッファの解釈の限界と欧米の初期リカード研究の功罪を明らかにすることを目指した。

(2) 日本のリカード研究者は彼等自身の初期リカード解釈を基礎として、リカードの労働価値理論の発展過程に関する研究に取り組んできた。こうした研究の蓄積は質量ともに充実しており、欧米にこれに比肩する研究を見出すことは難しい。しかし、従来、こうした日本の研究成果は欧米にはほとんど知られていなかった。本研究では、こうした日本の労働価値理論研究の成果を欧米の研究者に本格的に紹介しつつ、その意義を明らかにすることを目指した。

(3) 欧米のリカード研究はスラッファの解釈の影響を強く受け、日本のリカード研究はマ

ルクス研究の影響下で独自の展開を遂げてきた。両者には、各々、プラス面とマイナス面があると思われる。そこで本研究では、日本と欧米の初期リカードの利潤理論とリカードの労働価値理論に関する研究を比較検討することを通して、両者のリカード研究の特色、その特色を生み出した要因、その影響、その功罪を明らかにすることを目指した。

### 3. 研究の方法

本研究は基本的に個人研究であり、かつ文献的または理論的研究である。従って、特別な研究組織や研究プログラムは想定していないが、国内外の研究会・学会の場を適宜利用して、情報交換・研究交流を深め、これらを糧として調査・検討を進め、順次、研究成果をまとめることとした。具体的には、研究課題に関連する資料・文献の調査・収集、および、資料・文献の理論的検討に継続的に取り組み、主として、経済学史学会、マルサス学会、リカード研究会、経済思想研究会を情報交換・研究交流の機会として活かしながら、適宜、研究成果の国内または海外向け発表を目指すこととした。

### 4. 研究成果

(1) 最初に、1990年代以降の約20年間に焦点を絞り、日本のリカード研究と欧米のリカード研究に関連する資料・文献の包括的な整理・検討を行った。スラッファ編『リカード全集』の刊行が始まった1950年代から1980年代に至る欧米のリカード研究史は、日本でもすでに十分に検討されているが、1990年代以降の研究史の検討はいまだに追いついていないという状況であった。すなわち、1990年代以降、スラッファ派と新古典派の対立に加えて、テリー・ピーチが両者の批判する主張を展開し始め、さらに、森嶋通夫やデ・ヴィーヴォといった論者が次々と論争に参入したために、欧米のリカード研究は非常に複雑な対立の中で展開してきた。本研究では、こうした1990年代以降の欧米のリカード解釈をめぐる複雑な論争を解きほぐし、この間のリカード研究の功罪を明らかにするとともに、リカード解釈をめぐる党派的な対立の先鋭化の過程を明らかにした。こうした対立は欧米のリカード研究に固有のものであり、日本のリカード研究においては見出せないものだった。

(2) 同時に、1990年代以降のリカード研究のうち、とくに森嶋通夫のリカード研究に注目し、その功罪について文献的・理論的検討を行った。森嶋のリカード研究は、森嶋自身が著名の理論経済学者であったこと、高度な数学的手法を用いたこと、リカードの経済学を一般均衡理論の先駆として位置づける独創的な解釈を展開したことから、1990年代以降のリカード研究の中でも特別な意味合いをもっていた。しかしながら、日本では、森嶋

のリカード研究は必ずしも十分に検討されてこなかった。そこで本研究では、欧米における森嶋のリカード解釈をめぐる論争に注目し、とくにスラッファ派のハインツ・クルツたちの批判、テリー・ピーチの批判、それらに対する森嶋の反論を整理・検討した。その結果として、森嶋が伝統的な経済思想史研究の方法を取らず、自覚的に理論経済学研究の方法を用いてリカードの貢献を再構成しようとしたこと、多くの批判を受けた森嶋のリカード解釈には評価されて然るべき論点が少ないから含まれていることを明らかにした。

(3) 本研究に先立って、報告者は日本の初期リカード研究に関する研究成果を海外に向けて発信し、スラッファ編『リカード全集』刊行以来、日本の研究者たちがスラッファの「穀物比率論」解釈を批判しながら独自の初期リカード解釈を確立してきたことを紹介した。これ以降、日本の初期リカード研究は欧米の研究者たちの強い関心を引くようになった。とくにハインツ・クルツは「On David Ricardo's Theory of Profits」(2011)において、リカードは初期以降一貫して「穀物比率論」の論理を保持し続けていたと主張しながら、スラッファの解釈を擁護し、日本の初期リカード研究を批判した。そこで、報告者は本研究の一環としてクルツの見解を検討し、クルツが不十分な文献解釈に基づいて、晩年のリカードが「穀物比率論」を保持していたと主張し、スラッファの解釈を不当に拡張しようとしたことを指摘した。その上で、日本のリカード研究の成果に基づいて、リカードの経済学にとって労働価値理論の論理が本質的に重要であることをあらためて主張した。

(4) 本研究の中心的課題として、スラッファ編『リカード全集』刊行以来の日本のリカードの労働価値理論に関する研究を検討した。この間、日本の研究者たちはスラッファの「穀物比率論」解釈を批判した上で、初期以降のリカードの労働価値理論の発展過程に関する研究に邁進してきた。とくに羽鳥卓也、中村廣治、千賀重義は、スラッファのリカード研究から大いに刺激を受けながらも、リカードの労働価値理論を文献的かつ理論的に綿密に検討した結果、スラッファが十分に明らかにできなかった初期以降のリカードの労働価値理論の成立の論理、中期のリカードの労働価値理論の修正問題の過程と論理、晩年のリカードの不変の価値尺度の探求に関わる諸問題を解明した。本研究では、こうした日本のリカード研究の成果を整理・検討し、その優位性を明らかにした上で、それらの優れた研究成果が日本研究者たちの歴史的事実、文献的証拠、内在的視点を重視する姿勢に由来すること、そうした姿勢が欧米の研究者たちの理論的貢献や現代的意義を

重視する姿勢と対称的であることを明らかにした。

(5) 上記の日本のリカード研究者のうち、この間の日本のリカード研究史においてとくに重要な役割を果たしてきた羽鳥卓也のリカード研究をさらに検討した。羽鳥は世界で初めてスラッファの「穀物比率論」解釈を批判しただけでなく、スラッファのリカード研究の成果を踏まえて初期以降のリカードの労働価値理論の発展過程の研究に取り組むというその後の日本のリカード研究の基本的スタイルを確立し、日本の多くの研究者たちに大きな影響を与えた。本研究では、羽鳥のリカード研究の経緯を追いながら、羽鳥の初期リカードの利潤理論の研究、リカードの労働価値理論の研究、リカードの価値尺度の探求に関する研究を整理し、羽鳥のリカード研究の全体像を明らかにした。その上で、こうした羽鳥のリカード研究の方法または源泉を探求し、それが単にマルクス研究の影響にあるというよりも、過去の経済学の理論的意義を評価するためにこそ歴史的事実を重視しなければならないという羽鳥の基本的立場に関係するものであることを明らかにした。

(6) こうした研究と関連して、日本の同世代のリカード研究者たちと連携しながら、幅広い視野で、スラッファ編『リカード全集』刊行以来の日本のリカード研究の成果を整理し、今後の日本のリカード研究の発展を展望した。そして、日本のリカード研究が欧米のスラッファ派と新古典派の論争という枠組みから出発しながらも、その枠組みを乗り越えて、リカードと同時代人の研究に基づいてスラッファの「穀物比率論」解釈を批判するに至ったこと、リカードの機械論に関する「革新的変更」の問題やスミスとリカードの租税論の関係といった諸問題に新しい知見をもたらしたこと等を明らかにした。こうした日本のリカード研究の成果は、スラッファのリカード研究の成果を吸収しながらスラッファのリカード解釈を乗り越えようという羽鳥卓也以来の日本のリカード研究の伝統に由来するものであり、今後の日本のリカード研究のさらなる発展は、こうした方向性を保持しながら新しい知見を加えていくことによって可能になるものと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計9件)

福田進治「日本のリカード研究 - 労働価値理論を中心に - 」『マルサス学会年報』第23号、1-33頁、2014年、査読有

福田進治「初期リカードの利潤理論 - クルツ教授の批判を受けて - 」『人文社会論叢

社会科学編』第 29 号、155-172 頁、2013 年、査読無

福田進治「欧米のリカード解釈論争の展開 - 1990 年代以降の状況 - 」『マルサス学会年報』第 21 号、47-70 頁、2012 年、査読有

福田進治「森嶋通夫のリカード解釈をめぐる論争」『人文社会論叢 社会科学編』(弘前大学)第 26 号、55-71 頁、2011 年、査読無

[学会発表](計 10 件)

Shinji Fukuda「Ricardo Studies in Japan: On the Labour Theory of Value」New Developments on Ricardo and the Ricardian Traditions、2013 年 9 月 11 日、リヨン(フランス)

福田進治「日本のリカード研究 - 労働価値理論を中心に - 」第 23 回マルサス学会大会、2013 年 6 月 29 日、北海学園大学(北海道・札幌市)

福田進治(組織)「日本のリカードウ研究の新展開 - 理論と政策を中心に - 」第 76 回経済学史学会大会、2012 年 5 月 27 日、小樽商科大学(北海道・小樽市)

福田進治「欧米のリカード解釈論争の展開 - 1990 年代以降の状況 - 」第 21 回マルサス学会大会、2011 年 7 月 9 日、大阪商業大学(大阪府・東大阪市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

福田進治(FUKUDA Shinji)  
弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：00322925